

大谷石を扱う名工の技の伝承と後継者育成を目指して4月に開講する「大谷アカデミー」。開講に奔走した事務局長にアカデミーにかける思いや大谷石の魅力聞いた。

大谷石の魅力・技 伝承へ

大谷アカデミー事務局長

飯村 淳さん(51)

13人の職業いろいろ

——13人の受講生を迎えていよいよ開講です

21〜62歳の男女が集まりました。石屋の後継ぎや広告のディスプレイを手がけていた人、トラックの運転手、歯科助手など職種は様々。「勤めている会社を辞めてでもやりたい」「大谷石の彫刻を学んで店を出したい」。面接したときの受講希望者の意気込みには驚かされました。

——カリキュラムは

火曜の夜の座学と日曜の実技の週2回。前期の半年間に大谷石の施工に必要な彫刻、積み方、敷き方、張り方の4種類を学び、後期は自分に合う分野を選んでもらいます。



目標も用意しています。横浜市中区山手町にある大谷石造りの「横浜山手聖公会」

で、来年から始まる2期の復元工事に、受講生も参加してもらい、熟練の職人さんの手伝いをするので現場で技術を学んでもらいたい。

——技術の習得には時間が

かかります

週2回の1年では難しい。13人が2〜3年がかりでどのくらい育つかです。現場では

人手が足りないのです、受講しながら見習いという形で仕事に加われば、金銭的な面もクリアできる。そんな環境作りも考えています。

いいむら・じゅん 1962年、旧氏家町（現さくら市）出身。宇都宮東高校、慶大理工学部卒。ソニーに入社し、IC設計に携わる。帰郷後、ホテルや宇都宮餃子（ギョーザ）館などの経営を経て、2011年から大谷石の採掘や販売、施工を行う石材業「大谷石産業」の営業部長兼広報部長。

——開講のきっかけは

大谷石の歴史的建造物の復元や補修を依頼されても、職人がいないために解体せざるを得ません。すべての分野にわたって施工できる職人は5人ほどしかいません。

帝国ホテルの復元にも携わった大谷石彫刻家の渡辺哲夫さんが2年前から「後継者を育てたい。学校を作りたい」と語っていました。「養成しても仕事があるのだろうか」と半信半疑でした。

しかしここ数年、大谷石を使っている店舗や住宅などの物件を見て、「うちでも使いたい」と依頼が多くきています。県内外のほか、国外にも

東京五輪の施設にも

——2020年東京五輪の競技施設に大谷石を使うことを提案していますね

昨年10月に国立競技場を所管する日本スポーツ振興センターに提案書を出しました。いまの国立競技場のいたるところに大谷石が使われています。新競技場や他の施設にもぜひ使ってもらいたいです。

——大谷石は地域の財産としても再認識されています

開講式には地元住民の参加も呼びかけました。講座も月1回は開放したい。大谷石は地味な存在でした。蔵の修復だけでなく、インテリアなど新たなニーズにも応えられるような後継者を育て、大谷石の魅力を伝える発信力を高めたい。

(聞き手・田中正一)